

2. 今後の認知症診療での脳 SPECT の活かし方

東京医科大学 高齢総合医学分野
清水 聡一郎

近年、アルツハイマー型認知症を取り巻く環境は刻々と変化しており、特に本邦での抗Aβ抗体医薬、アミロイドPET、脳脊髄液の保険償還は大きな話題となっている。

認知症診療、特に鑑別診断において問診や診察が重要であることは周知の事実であるが、種々の補助検査が役に立ち、神経学的検査、画像検査などが利用されている。

脳画像検査は、CT、MRIのみならず脳血流SPECTやドパミントランスポータシンチグラフィも日常診療で広く利用されている。

ADのサブタイプとしてTypical ADは55%、Limbic-predominantは21%、残りの17%はHippocampal-sparing、15%はMinimal atrophyのような萎縮が軽度、若年ADでは海馬の萎縮が軽度であることが報告されている(Ferreira D et al. Neurology® 2020;94(10):436-448)。また生前AD診断であった547人の病理結果により純粋なADは少なく混合病理であることが報告されている(Lei Y et al. Neurology® 2020;94(2):e142-e152)。

本講演では、今後の認知症診療において脳SPECTをどのように利用していくか、そして鑑別診断の重要性をお伝えしたい。また本年7月に参加したAlzheimer's Association International Conference (AAIC2024：アルツハイマー病協会国際会議)の内容も共有できればと考える。

本講演がご参加の先生方の診療の一助になれば幸いである。

略歴

2000年 東京医科大学卒業	2009年 東京医科大学 老年病学講座 助教
同大学 老年病学講座 臨床研修医	2011年 国立精神・神経医療研究センター病院 神経内科
2004年 同大学 老年病学講座 臨床研究医	
2006年 厚生中央病院 総合内科	2012年 東京医科大学 老年病学講座 助教
2007年 東京医科大学 老年病学講座 臨床研究医	2014年 同大学 高齢総合医学分野 講師
	2019年 同大学 高齢総合医学分野 准教授
2008年 米国 カルフォルニア大学 サンフランシスコ校 Post-doc Fellow	2020年 同大学 高齢総合医学分野 主任教授
	2023年 同大学病院 総合診療科 科長を併任

現在に至る